

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The language norms of Byelorussian-Lithuanian chronicles (1) : morphological norm of nouns

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/947

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ベラルーシ・リトアニア年代記の 言語規範（1）*

——名詞の形態規範——

岡 本 崇 男

1 はじめに

本論文は16世紀から17世紀末にかけて成立したベラルーシ・リトアニア年代記の形態規範を記述することを第一の目的としている。分析の対象となる年代記資料は『バルクラボウ年代記』（17世紀末，[資料1]—以下，BAR）を中心とし，併せて『クラシンスキー年代記』（16世紀，[資料2]—以下，KRAS）と『ラチンスキー年代記』（16世紀，[資料2]—RAČI）に記録された語形との比較も念頭に入れる。さらに，16世紀末に出版された『リトアニア大法典（1588年）』（[資料3]—以下，STAT）に見られる形態も折に触れて参照する。一般にキエフ・ルシ時代の中世ロシア語文献の場合，法律テキストは年代記テキストの言語分析を行うための有力な資料となりえない。互いの文献ジャンルの言語特徴に大きな違いが認められるからである。しかし，16-17世紀南西ルシにおける言語状況はこのことを可能にしている。なぜならば，文献ジャンルの違いを乗り越えて言語的な近似性が強くなっているのである。特に，法典はその文献の性質上，言語使用にかなりの統一性が必要であることは自明のことである。また，この意味において，成立した

*本論文は平成11-13年度文部省科学研究費補助金による成果の一つである（基盤研究(C)(2)，研究課題名「リトアニア・ベラルーシ年代記テキストにみられる言語規範意識の分析」，課題番号11610546）。

時代がBARに近いにもかかわらず、守旧的な言語使用が目立つ『イエヴレイノフ年代記』（17世紀末—[資料2]）や新旧の言語特徴が混在している『ビホヴェツ年代記』（16世紀中期から17世紀初頭、[資料1]）は検討の対象から除外した。また、必要に応じてキエフ・ルシ時代のロシア年代記に見られる語形との比較を行う。このために使用するテキストは『ノヴゴロド第一年代記（古輯本）』（[資料4]—以下、NOV）および『過ぎし年月の物語』（[資料5]—以下、PVL）である。

なお、BARはリトアニア大公国西部のドニエプル川中・上流地域の出来事を中心に記録した地域色の強い年代記であり、KRASとRAČIはリトアニア建国史に記述の焦点を置いた年代記である。

2 名詞の形態規範

名詞類（名詞、形容詞、代名詞、数詞など格変化を有する品詞）は、比較文法で行われている語幹形式と語幹形成音にもとづいて分類するのがもっとも厳密な方法であると思われるが、分析対象となるテキストでは語尾変化と文法的性との結びつきが、現代東スラブ諸語ほどではないにしても、かなりの程度に強まっているので、文法的性にもとづいて形態規範を記述していく。

先ず、文法的性については（1）男性、（2）中性、（3）女性（および総性）がみとめられる。ただし、変化のタイプは中性に属しているが男性として扱われるものや女性名詞と同じ語尾変化を示す男性名詞も若干ながら存在している。これらについては、変化のタイプにしたがっていずれかの性に分類する。

2.1 単数変化

2.1.1 男性名詞および中性名詞

男性名詞および中性名詞の格語尾は以下のとおり。

	男 性	中 性
主	-∅	-o/-e, -a
生	-a, -u	-a, -u
与	-u, -ovi	-u
対	-o, -a	-o/-e
造	-om/-em	-om/-em
所	-u, -e, -ě/-u, -i	-e, -u/-u, -i

表1: 男性名詞・中性名詞の語尾

男性名詞と中性名詞は単数においてほぼ同じ格変化をもっている。

2.1.1.1 主格 男性名詞はゼロ語尾（原本の表記では -ъ または -ь で終る）、中性名詞は語尾 /-o/ または /-e/, /-a/ で終る。人物を表す男性名詞の一部（владыка, воевода, патриарха 等）、男性の名前的一部分（Гриша, Кишка）は主格語尾が /-a/ となり女性名詞と同じ格変化を示す。非難のニュアンスを含む здрайца（「裏切り者」）のような語彙も基本的に女性名詞と同じ格変化をもっているが（здрайца の複数造格形については後述）、文法的には男性扱いである。また、男性の名前のなかには主格語尾 /-o/ をもつものが若干存在している（Гаврило, Дмитро 等）。

(1) 中性名詞主格語尾 /-e/, /-a/ 語尾 /-e/ は接尾辞 /-n-/, /-t-/ によって形成される動詞派生名詞（-ние, -нье, -тие, -тье）と語幹が硬口蓋音あるいは語源上の軟子音で終る名詞の語尾である（море, поле; местце, слонце）。これらの名詞は主格と対格を除いて、表1に示された男性・中性共通の格変化語尾を持っている。

一方、/-a/ は単数主格・対格以外で語幹が延長される名詞に特有の語尾である。すなわち、これらの名詞は имя（「名前」）→ имен-, дитя（「子供」）→ дитят-, жеребя（「子馬」）→ жеребят-, княжа（「領主」⁽¹⁾）

(1) княжа は本来中世キエフ国家の「分領領主 князь の子供」を意味していたが、リトアニア大公国では князь の下位にある領主を指す。

→ княжат- というように、接辞 /-en-/、 /-at-/ によって斜格語幹が形成されるのである。

BAR において特徴的なことは、-ие、-ье で終る動詞派生名詞主格形が語尾の直前にある и および ь を失ってしまった結果、単数主格形が -не、-те で終る中性名詞が多く存在することである。例えば、“блискане”（「光ること」），“веселе”（「婚礼」），“взяте”（「取ったこと、取られた（手段）(?)」），“держане”（「支配、領有」），“замешане”（「干渉」），“казане”（「声明」），“кровопролите”（「流血」）等。こうした形式が存在することは、現代ベラルーシ語の блисканне, жыццё, узяцце (cf. R. блискание, житие, жизнь, взятие) 等の形式を生むに至った *Cije, Сьje > CC'e > ĆCe* のプロセスが BAR の書かれた時代にすでに進んでいたことを物語っている（*C* は任意の子音、*C'* は *C* に対応する軟子音、*Ć* は硬口蓋子音）。つまり、表記の上では блискане, взяте のように語尾 -e の直前にある子音が重複されていないのだが、現実にはすでに長い子音として発音されていた可能性が強い。そして、このプロセスは動詞派生名詞に限らず、同じ音環境にある他の名詞にも及んでいる（例えば、збожье → збоже「穀類」、дережье → дереве「樹木（集合名詞）」）。

一方、伝統的な綴は主格形に限れば“благовещение”（「生神女進堂祭」），“вознесение”（「主の昇天祭」），“сретение”（「主の進堂祭」）に見ることができる。こうしたキリスト教関連の語彙は原則として伝統的な綴が主格以外の格形でも守られていることから、-ие、-ье という表記が文体的な機能を果たしている⁽²⁾と考えることができる。ところが、世俗的な内容を

(2) 表記の揺れがあるのは西暦（キリスト生誕暦）を表現するための定型句 “року божого нароження...” (= року божого сына нароження「神の子の誕生（以降）の～年」) のみである。これにはいくつかのバリエーションがあって、正統な綴 (“року божого нароження 1587” [142], “року божого нароження 1603” [166]) の他に、これに準ずる表記 (“року божого нароженья 1596” [155]) があり、さらに新しい綴 (“лета божого нароження 1595” [153]) も観察される。新しい綴の例は BAR においては少数派なのであるが、РАСІ および KRAS では圧倒的に多数派の地位にある。

もったいくつかの語彙については伝統的な綴と新しい綴が併用されており (веселие/веселе, замешание/замешане), 新旧の綴の間に特別な文体的差異が認められない。したがって, 伝統的な綴が文体的な価値を持つのはキリスト教に關係する語彙に限られるとすることができる。

なお, BAR にはベラルーシ語に生じた *Cije, Сьje > CC'e > ĆĆe* の音変化に対応するウクライナ語の音変化 *Cije, Сьje > CCja* (または *CC'a*) を反映した中性名詞単数主格形も若干ながら認められる。例えば, “и то было зерна вельми мякко” [163] (「それで (ライ麦の实の) 粒が極めて軟らかかった」), “абы далей до крве сполней братии нашої розляння не пришло” [161] (「事態がこれ以上進んでわれわれ共通の兄弟たちの流血にまで至らないために」)。

(2) княжа の文法的性について 先にも述べたように княжа は本来中性名詞であるが, BAR のテキストでは男性と中性のあいだで揺れが見られる。例えば, “княжа семикгородское” [138, 138, 139, 142] (「トランシルヴァニア侯」), “тых послов поткало княжа” [147] (「この使者たちに侯が出会った (?)」) では княжа と一致しているのが形容詞中性単数主・対格形 семикгородское および動詞中性過去形 поткало であるが, “а потом скоро казанье вчынил на две године княжа” [149] (「その後すぐ, 二時に侯は声明を出した (?)」), “на што княжа им отказал” [150] (「それにたいして侯は返答した」), “такъже княжа его милость... вказал до пана канцлера” [150] (「侯閣下は大臣に命じた」) では主格主語 княжа と一致する過去時制動詞が男性形である。

2.1.1.2 生格

(1) 男性名詞の生格語尾 生格語尾は /-a/ または /-u/ である。人名は

比較的語尾 /-a/ と結び付くことが多く、特に神聖な概念および聖者や聖職者、そして国王や領主などの有力者の名前にはほぼ確実に語尾が /-a/ となっている。例えば、“Рождство господа нашего *Иисуса Христа*” [138] (「われらの主イエス・キリストの聖誕」)、“силою и властью святаго *духа*” [155] (「聖霊の力と権能によって」)、“на Рождество *Иоанна Предтечи*” [145] (「洗礼者ヨハネの生誕日に」)、“за держаня кроля пана нашего *Жикгимонта Третьего*” [152] (「国王ジギモント三世の治世に」)、“на поли Буйницком, имену велможного его м[и]л[ости] князя *Богдана Соломерецкого*” (「ブイニチの野で、すなわち有力者であるボフダン・ソロメレツキ閣下の領地で」)、“от князя московского *Ивана Василевича*, от *Максимилияна*, цесаря христианского” (「モスクワ公イヴァン・ヴァシリエヴィチから、そして神聖(ローマ)皇帝マクシミリアンから」)等。また、これらの人物の地位を表す語彙も同様に生格語尾 /-a/ を持つ。例えば、ギリシャ正教または帰一教会の聖職：митрополит (「府主教」), архиепископ (「大主教」), епископ (「主教」), священник (「司祭」), カトリック教会の聖職：бискуп (「司教」), 世俗の有力者：цесарь (「(神聖ローマ)皇帝」), король/кроль (「国王」), князь (統治者としての「公」またはリトアニア大公国の最高位の支配層に属する人々に対する呼称としての「公」)など。しかし、престол (「王座」— ВАР では「総主教座」)には“патриаршего *престолу*” (1例) と “*престола* (великого) константинопольского” (2例) のように両方の語尾と結び付く。

一方、人間以外を表す普通名詞には語尾 /-u/ と結び付きやすいようである。例えば、“варунку” (< варунок (?) 「条件」), “верху” (< верх 「上(部)」), “гниюсу” (< гныс 「毒気, 瘴気」), “дожду” (< дожд 「雨」), “маку” (< мак 「ケシ(の実)」) など。

ただし、暦に関係する名詞 “месяца/месеца” (< месяц 「月」) およ

び月の名⁽³⁾ “генваря/генвара” (< генварь 「一月」), “марта” (< март 「三月」), “апреля” (< апрель 「四月」), “мая” (< май 「五月」), “июня” (< июнь 「六月」), “июля” (< июль 「七月」), “августа” (< август 「八月」), “септевря/септебря” (< септебрь/-брь 「九月」), “октября/октября/октовря” (< октябрь/-брь 「十月」), “ноембра” (< ноябрь 「十一月」), “декабря” (< декабрь 「十二月」), それから “дня” (< день 「日」) および曜日の名 “понеделка” (< понедельник 「月曜日」), “четверга” (< четверг 「木曜日」) は語尾 /-a/ のみと結び付く。これにたいして, рок 「年」の生格は基本的に “року” であり (87例), рока は1例のみである (“уже полтора рока” [157])。

(2) 中性名詞の生格語尾 中性名詞は人間を含めた動物の子供を表す名詞 (主格 -я) を除き, 一般に無生物を表している。しかし, 男性名詞の場合と同じように無生物を表す中性名詞生格形がすべて語尾 /-u/ を持つわけではない。むしろ, 接尾辞 /-stv-/ によって形成された抽象名詞 (беспеченство, благословенство, княство, королевство, панство, множество など) や接尾辞 /-n-/ , /-t-/ によって形成された動詞派生名詞 (заклинание, крещение, розлиание など) は生格語尾が /-a/ となる。また, 物質名や集合的名詞でも語尾が /-a/ となることが多い。“варива” (< вариво 「煮たもの, 粥」), “жита” (< жито 「ライ麦」など)。一方, 語尾 /-u/ を持つと思われる例は少数で, “житу” (cf. жита), “схоженю” (< схожене 「集まること」), “неблагословенству” (< неблагословнство 「祝福を与えないこと」) などしかない。

(3) 月の名前は常に生格で現われるため, 規範的な主格形がわからない。特に, 一月および九月~十二月の主格形にかんしては, 生格形が -ра で終る例があることから, генвар のような形も許容されたのではないかと想像される。しかし, VAR に現われる他の男性名詞では単数主格が -р で終るものと, -рь で終るものとの格変化を表記の上で比較的徹底して区別する傾向にあるので (つまり, 主格が -р で終れば, 生格は -ра/-ру となり, 主格が -рь であれば, 生格は -ря/-рю となる), 語源的に正しい -рь を仮の規範的な主格形とする。

なお、збожу「穀類」には“збожя”という生格形があるのだが、これとは別に“збожу”, “збожую”, “збожью”も生格の可能性がある。すなわち, “цена збожю средняя была” [163] (「穀類の価格はほどほどであった」), “Яко ж и знак тому упадку збожу” [163] (「さらにまた穀類の病害の兆しがあった」), “Тот рок 606 з ласки божей добрый был, ..., а збожю была цена: ...” [171] (「その606 (=1606) 年は神の慈愛により良い年であった…また穀類の価格は次のとおりであった」), “Тот рок з ласки божей был здоров на люди, также и врожай збожу середний был, также и цена збожу была: ... “ (「その年は神の慈愛により人々には禍がなかった。また穀物の収穫はほどほどであり、また穀物の価格は次のとおりであった」)。これらの例が示すように збожу (збожую, збожью) は、その年の天候や穀物の価格を記述するときに現われる語彙である。したがって、урожай (врожай) 「収穫」および цена 「価格」と共に使用されることが多い。

しかし、これらの語彙は上記の例と類似したコンテキストにおいて必ずしも生格形と結び付くわけではない。例えば、урожай (および неурожай 「不作」) は, “Такъже у збожю неурожай” [143] (「そしてまた穀類は不作であった」 — 前置詞 у (в) + 所格), “на збожсье мерный был урожай” [153] (「穀物にはほどほどの収穫があった」 — 前置詞 на + 対格), “на то на все велми был урожай добрый” [157] (「これら全てのものに大変良い収穫があった」 — 前置詞 на + 対格), “Тепер же з ласки божое урожай на все добрый был” [168] (「今度は神の慈愛によって全てのものに良い収穫があった」 — 前置詞 на + 対格) などのように前置詞句と結び付くこともある。また、цена は “У весень цена всему збожю была такова, як в року выш описан” [165] (「秋はすべての穀物の価格が先に述べた年と同じくらいであった」) のように与格形と結び付いて「~の価格」の意味で使用されることもある。

この表現に与格が使われている例はSTATにも見ることができる。すなわち、“Цена збожью, сену и речам огородным”（「穀類，干し草，菜果の価格」）。“збожью”，“сене”ともに語尾/-u/を持つ中性名詞であり，これらのみでは生格か与格か判別できないが，もう一つの同位成分である“речам огородным”は明らかに複数与格形なので，これはценаと与格との語結合の例であるということが出来る。ちなみに，STATではзбоже（збожье）の生格形としてзбожьяが確認される（“о краленью збожья всякого”「あらゆる穀類の盗難について」）。

збоже以外の語彙の生格形が同種の文脈に現われていると思われる例は以下のとおりである。すなわち，“Житу добрый урожай был и вмолотистый чисто” [167]（「ライ麦の収穫は良く，きれいに脱穀できるものであった」），“Гречихи добрый урожай был и пленна была” [169]（「ソバの収穫は良く，実のつきもよかった」）。“житу”（主格 жито）についてはзбожеと同じく生格なのか与格なのか判別しがたいのであるが，全く同じ構造を持つ二つ目の例においては“гречихи”が主格 гречиха（「ソバ」）の生格形であることに疑いを差し挟む余地はない。⁽⁴⁾

結局，збожу（збожую，збожьё）が生格形であるのか，あるいは与格形であるのかを断定することは困難である。むしろ，この語彙が現われる定型表現の規範としてはいずれの格形も許容し得ると考えざるを得ない。

(4) 当初，やはり урожайと生格形が結び付いた例と思われた文“чоснику и того было велми малый урожай” [169]は，“маку не было нитроха, ни цибули; чоснику и того было велми малый урожай”という一節に含まれている。しかし，底本の句読法に従うと，“чоснику”（чосник「ニンニク」の生格）の直後にある“и того”が何を意味しているのかがわからない。おそらく，この一節は“маку не было нитроха, ни цибули, чоснику; и того было велми малый урожай”と句読点を打つべきで，そうであれば「ケシは少しもなかった。キャベツもニンニクも（なかった。このため収穫はきわめて少なかった）」と理解することができる。なお，底本に添えられた原本の写真二葉を見る限り，もともと使用されている句読点はコンマとコロンのみである。

2.1.1.3 与格 男性・中性の区別なく単数与格語尾は /-u/ が一般化されている。しかし、男性名詞には語尾 /-ovi/ をもつ例が若干存在している。すなわち，“часови”（< час 「時，時間」）[147]，“респонсови”（< респонсум 「返答，返書」）[159]，“кгвалтови”（< кгвалт 「強制，強要」）[159]，“хоругови”（< хоруг 「軍旗（?）」）[161]，“гетманови”（< гетман 「軍司令官」）[163] がこれにあたる。

男性単数与格語尾 /-ovi/（および /-evi/）は KRAS, RAČI, STAT などにも散見されるが、これらはもっぱら人名、役職、階層など人間を意味する語彙である。すなわち，KRAS: “Еикшеви”（< Еикш または Еикшыс = 人名），RAČI: “Еикъшневи”（= Еикшеви），“королеви”（< король 「王」），“кашталянови”（< кашталян または каштелян = 役職名），STAT: “шляхтичови”（< шляхтич 「小地主貴族の子息」）等。したがって，BAR において人間を表す語彙以外にも語尾 /-ovi/ が現われているという事実は，この語尾が徐々に一般化されていることを意味しているのかもしれない。

2.1.1.4 对格 人間および動物を意味する男性名詞は生格と一致する（“первей коня под ним застрелили... козаки” [154] 「コサックたちは先ず彼が乗っていた馬を撃った」）。その他の男性名詞と中性名詞は主格形と同じ。

2.1.1.5 造格 男性名詞・中性名詞ともに語尾 /-om/ または /-em/ をもつ。

語幹が硬子音で終れば語尾 /-om/，軟子音で終れば語尾 /-em/ となる。語幹が硬口蓋子音（/-ts-, -tʃ-, -ʃ-, -ʒ-/）で終る名詞も原則として軟子音語幹名詞と同じく語尾 /-em/ と結び付くのであるが，若干の動揺が見られる。例えば，“отец з сыном, сын со *отцем*” [165]（「父が息子と，息子が父と」），“с *плачем*” [157]（「泣きながら」），“з великим *плачем*”

было видети тых людей голодных” [165] (「そうした飢えた人々を見るのはおおいに涙をそそった」) などに対して, “много их плачом были поршони” [149] (「彼らのうちの多くは泣いて取り乱した」), “пол князем великим московским, князем Иваном Василевичом” [139] (「モスクワ大公イヴァン・ヴァシレヴィチ公の支配下にある」) のような例が存在している。

硬口蓋子音語幹名詞の単数造格語尾に統一性がないのは BAR に限ったことではない。例えば RAČI では мечом (< меч 「剣」), плачом (< плач 「泣くこと」) に対して, вѣчем (< вѣчем 「民会」)。そして父親の名前に付加して「~の息子」を意味する接尾辞 -вич- を持つ名詞にいたっては -вичом /-вичем と両方の語尾が見られる。一方, KRAS においては вечом (< вече, плачем (< плач) のような RAČI と異なる形式が存在しており, -вич- を持つ名詞は -вичом のみである。しかし, STAT では сторожем (< сторож 「辺境の守備を担当する役職」) のような少数の例を除くと, 語尾 /-om/ が一般的である。すなわち, мужом (< муж 「夫」), шляхтичом (< шляхтич 「地主貴族の息子」), ножом (< нож 「刀」) など。

2.1.1.6 所格 単数所格形は男性・中性の区別なく, 硬子音で語幹が終れば語尾が /-e/ または /-u/ となり, 軟子音および硬口蓋子音で語幹が終れば語尾が /-i/ または /-u/ となる。

(1) 語尾 /-e/ をもつ名詞 語幹が後口蓋音 /-k/, /-g/, /-x/ 以外の子音で終る男性名詞と接尾辞 /-stv-/ によって形成された中性名詞 (単数主格形 -ство) は, ほとんどの場合, 所格語尾 /-e/ と結び付く。男性名詞の例は以下のとおりである。

• 男性名詞：

—普通名詞— “(у) хлебе” (< хлеб), “(у) вечере” (< вечер), “(на) свете” (< свет), “(на) обеде” (< обед), “(в) костеле” (< костёл); “(во) граде” (< град), “(на) соборе” (< собор), “(у) притворе” (< притвор), “(на) лесе” (< лес), “(в) респонсе” (< респонсум → 2. 4. (1)), “(на) кгрунте” (< кгрунт) “зъезде” (< зъезд), “сыноде” (< синод), “(у / при) дворе” (< двор), “(у) часе” (< час)

—固有名詞 (地名) — “(у) Києве” (< Киев), “(у) Баркулабове / Боркелабове” (< Баркулабов), “(у) Лво́ве” (< Львов), “(у) Кракове” (< Краков), “(у) Шклове” (< Шклов), “(у) Блхове” (< Быхов), “(у) Рогачове” (< Рогачов), “(у) Крычове” (< Крычов), “(у) Днепре” (< Днепр)

—固有名詞 (人名) — “(о) Петре” (< Петр), “(о) Дмитре” (< Дмитр, Дмитро)

• 中性名詞 “(у) жите” (< жито), “(у) месте” (< место), “(в) лете (лѣте)” (< лето), “(у) селе” (< село), “(в) коле” (< коло), “(на) писме” (< писмо), “(в) князстве” (< князство), “(на) владычестве” (< владычество), “(на) поселстве” (< поселство), “(о) отщепенстве” (< отщепенство), “(во) хрестиянстве” (< хрестиянство), “(е) господарстве” (< господарство), “при благословенстве” (< благословенство)

なお、人名 Петр には語尾 -ѣ をもつ例がある (“Петръ”)。

(2) 語尾 /-u/ をもつ名詞 語幹が軟口蓋子音 /-k/, /-g/, /-x/ または硬口蓋子音で終る名詞は所格語尾が /-u/ となることが多い。

• 語幹が軟口蓋子音で終る名詞：

1. 男性— “(на) берегу” (< берег), “(в) торге” (< торге),

“(в) жемчеге” (< жемчег), “(при) рлнке” (< *рынок),
“(на) початке” (< початок), “(у) замке” (< замок), “(в)
роке”

(< рок), “(у) Чечерске” (< Чечерск)

2. 中性— “(у) войску” (< войско)

• 語幹が硬口蓋子音および軟子音で終る名詞:

1. 男性— “(о) замысле” (< *замысл), “(по) прожнем)
обычаю” (< обычай), “(во) уокою” (< упокой), “(на)
рокоше” (< рокош), “(у) Любече” (< Любеч)

2. 中性— “(о) местце” (< местце), “(на) селище” (< селище),
“(на) врочише” (< врочище)

• その他の子音で終る名詞 (男性のみ) “(в) дому” (< дом), “(на)
фребру” (< фребр), “(на) бору” (< бор), “(у) цвету” (< цвет),
“(в) Сендомиру” (< Сендомир), “(на) Низу” (< Низ)

接尾辞 /-sk-/ によって形成される地名も語幹が軟口蓋子音で終るので、やはり所格語尾は /-u/ となる。すなわち、(у) Витебску, (у) Пропойску, (у) Смоленску, (у/в) Менскле, (у) Полоцку など。また、語末の音変化 *Cije* > *Cbje* > *CC'e* に関係する中性名詞は、この変化のいずれの段階を反映する語幹形式であっても語尾 /-u/ と結び付く傾向にある。すなわち、(у) збожью, (по) Воздвижению, (по) Крещению, (по) взятию, (по) приятию, (по том) веселю, (о таком) постановению, (в добрым) уважению, (в добром) сумнению, (в) погоню, (на) свитанью, (по) влеханью, (у) каменью (дорогом), (на том же) имению (своем) など。

(3) 語尾 /-i/ をもつ名詞 語幹が硬口蓋子音および軟子音で終る名詞は、かつて東スラブ語では所格語尾が /-i/ となっていたのであるが、先に見たように BAR ではこれらの名詞が基本的に語尾 /-u/ と結び付く。したがっ

て、語尾 /-i/ をもった例は極めて少ない。男性名詞では“(o) цари (Дмитре)” (< царь), “(y) Гомли/Гоми” (< Гомель), 中性名詞では“(на) поли” (< поле) のみである。

(4) 二種類の語尾 /-e/, /-u/ をとる名詞 Покров (「生神女庇護祭」), царство (「王国」), Дух (「(聖) 霊」) には二種類の所格形が認められる。すなわち, Покрову/Покрове, царству/царстве, Дусе/Духу.

сейм (「ポーランド議会」) も二種類の形式 (на) сейму/сейме をもっている。この名詞にはさらに на сейми という所格形があり, これは語幹末子音が硬口蓋・軟子音ではない名詞で語尾 /-i/ をもつ唯一の例となる。“ѣ → и” というウクライナ語的な変化は BAR にあまり頻繁に見られる現象ではないのだが, この特殊な所格語尾はやはり e の異形態と考えざるを得ない。

(5) 二種類の語尾 /-i/, /-u/ をとる名詞 край (「地方」) と Бересте, Берестье (都市名) には伝統的な格語尾 /-i/ と硬口蓋・軟子音語幹名詞に一般的な語尾 /-u/ をもった二種類の所格形がある。すなわち, у краи/краю, у Берести/Берестю/Берестью.

以上のように, 男性および中性名詞の単数所格語尾は語幹末子音の種類によって決定される傾向がある。特に, 語幹が軟口蓋子音と硬口蓋・軟子音で終る名詞がそれぞれ /-e/ (< ѣ), /-i/ という本来の語尾と結び付く例が少なく, いずれも /-u/ をとることが一般的であるというのは, 現代のベラルーシ語およびウクライナ語に通じる特徴である。しかし, /-e/ と /-u/ の使い分けについては, むしろ BAR のほうが単純な基準にもとづいているようである。したがって, 軟口蓋子音と語尾 /-e/ が結合するときには生ずる語幹末子音の交替 (/k ~ c, g ~ z, x ~ s/) が確認できるのは “Дусе” (cf. Духе) のみとなっている。

2.1.2 女性名詞

女性名詞単数格語尾は以下のとおり。

	I	II
主	-a	-∅
生	-i	-i
与	-e/-i	-i
対	-u	-∅
造	-oju/-eju	-ju, -u
所	-e, -ě/-i	-i
呼	-o	

表2：女性名詞の語尾

2.1.2.1 主格 単数主格形は語尾 /-a/ (Iのタイプ) または /-∅/ (IIのタイプ) である。Iのタイプの名詞には若干の男性名詞が含まれている。すなわち, воевода (「地方行政長官」), староста (「воеводаより下位の行政長官」), владыка (「大主教」), патриарха (「総主教」— 2.4. (3) 参照) などの役職名, здрайца (「裏切り者」) などの卑称名詞, そして男性の名前 (Сапега, Рагоза, Девочка など) である。また, IIのタイプの名詞はすべて硬口蓋・軟子音語幹名詞で, 主格形が原則として -ь で終る。ただし, *кров (「血」 < кровь < кръвь) は BAR, RAČI, KRAS に主格形が確認できないものの, これら三つの年代記に対格形として кров が現われているので, おそらく主格形も -ь が欠落していたと思われる (cf. U. кров, крив, Br. кроў)。

2.1.2.2 生格 生格語尾は I/IIのタイプともに /-i/ である。しかし, *кров には крови, крви とならんで語尾 /-e/ をもつ形式 крве がある。

2.1.2.3 与格・所格 女性名詞の単数与格語尾と所格語尾は常に等しい。

Iのタイプの名詞で、語幹末子音が硬口蓋・軟子音でなければ語尾は /-e/ となり、それ以外のIのタイプの名詞とIIのタイプの名詞は語尾が /-i/ となる。

語尾 /-e/ は原則として“e”と綴られるが、男性名詞の場合と同じように“ѣ”となっている例が少しある (по годинѣ, в ваннѣ)。

語幹が軟口蓋子音で終る名詞では語尾 /-e/ と結合する際に語幹末子音が別の子音と交替する (→ 2. 1. 1. 6)。すなわち, “(на/в) дорозе” (< дорога 「道」), “(на) горце” (< горка 「小さな山」), “(на) речце” (< речка 「小さな川」), “дочце” (< дочка 「娘」)。Iのタイプの女性名詞と同じ変化をもつ男性名詞にもやはり “владыце (луцкому)” (< владыка 「大主教」), “(по) патриарсе” (< патриарха 「総主教」), “Сапезе” (< Сапега 人名) のように語幹末子音の音交替が見られる。ただし, “(в замку) Дисенке” (< Дисенка 地名) は語幹末子音 /-k-/ に語尾 /-e-/ が直接結合した例である。

語尾 /-i/ をとる名詞の例は以下のとおりである。

- Iのタイプ (硬口蓋・軟子音語幹名詞) — (на той) стражи, (к) земли, (по) воли, (у) брони (Остроговой), (к) вечерни, пашни, (на) пустыни, (в) дири, (у) пуши, (в) Полши, (у) Речицы, (на) Орши
- IIのタイプ — (по) мысли, (у) восени, (в/при) памяти, (в) целости, (по) волости, (о) бытности, (в) Речи / Речы (Посполитой), (в) ночи, (о) полночи, (на) чести, (на) нелели

2.1.2.4 対格 女性名詞は単数主格語尾が /-a/ であれば対格語尾 /-u/ を取り、主格がゼロ語尾であれば対格も同形となる。

2.1.2.5 造格 Iのタイプの名詞は語幹末子音が硬口蓋・軟子音のとき

/-eju/, それ以外の子音のとき /-oju/ となる。ただし、男性名詞 *здрайца* (「裏切り者」) の単数造格形は “*здрайцою*” である。

II のタイプの名詞は語尾 /-ju/ を取って、綴の上では -*ью* (ときに -*ью*) で終る (*милостью, мощью, волностью, пилностью, речью*)。しかし、少数ながらキエフ・ルシ期中世ロシア年代記にみられるような古いタイプの語尾 /-iju/ も存在している (*кровию, смертию, властью, пилностию*)。また、接尾辞 /-ost'/ (-*ость*) によって形成される形容詞派生の抽象名詞は中性の動詞派生名詞や集合名詞に見られた語末の音変化 (*Cije > Cъje > CC' e*) と同じ現象を反映した例が多い (*жалостью, милостью, ведомостью, зѣленостью, вдячностью, および音声環境が同じ частью*)。

2.1.2.6 呼格 男性名詞の *господи* (< *господь, господин*) を除いて、呼格特有の語尾が確認できるのは I のタイプで語幹が硬子音で終る単数女性名詞のみである。以下の例を参照せよ。

“А коли тот наход у вород, адбо в дому кого стоячи хлеба просили, отец з сыном, сын со отцем matka з дочкою, лочка з маткою, брат з братом, сестра з сестрою, муж з жоною, тыми словы мовили силне, слезне, горко, мовили так: “*〈Матухно, зезулюхно, утухно, панюшко, сподариня, слонце, месец, звездухно, дай крошку хлеба!〉*” [165] (「門前にあるいは誰かの家に大挙して集まった人々が立ったままでパンを乞うときには、父が息子と、息子が父と、母が娘と、娘が母と、兄弟同士で、姉妹同士で、夫が妻と以下の言葉を強く、涙ながらに、つらそうに言うのであった。【お母様、お父様、*утухна* (語義不明)、ご主人様、奥方様、お嬢様、お日様、お月様、お星様。パンを一かけ下さい】)。

“А коли варива просили, тые слова мовили: 《Сподариня, перепелочко, зорухно, зернетко, солнушко, лай ложечку дитятку варивца сырого.》” [165] (「粥を乞うときには次の言葉を言うのであった。『お嬢様, ウズラ様, お星様, зернетко (語義不明), お日様。こどもに (せめて) 煮る前の粥を一匙 (でも) 下さい』」)

呼格語尾 /-o/ をもつ例は, 接尾辞 /-uxn-/ (主格形 -ухна) か, 接尾辞 /-k-/ (主格形 -(ш/ч)ка) によって形成される主観的・情緒的ニュアンスを帯びた話言葉特有の女性名詞である (/ -uxn-/ は「大きい」, /-k-/ は「小さい, 可愛い」というニュアンスを与える)。しかし, сподариня のように軟子音語幹の女性名詞は主格形を呼びかけに用いている。

2.2 複数変化

	男 性	中 性	女 性
主 生	-i, -e, -ove	-a	-i
与 対	-ov/-ev/-ej/-ø/ -ej	-ø	-ø/-ej
造 所	-om/-em	-am, -em/-om	-am, -em
	主格または生格	-a	主格または生格
	-ami, -mi, -i	-ami, -i	-ami, -mi
	-ax, -ex	-ax, -ex	-ax, -ex

表 3: 複数形の語尾

2.2.1 主格

複数主格形語尾は男性名詞と女性名詞が /-i/, 中性名詞が /-a/ となる。しかし, 男性名詞の中には語尾 /-e/ あるいは /-ove/ をもつものが若干存在している。

(1) 語尾 /-e/ をもつ男性名詞 BAR で確認された複数主格語尾 /-e/ をもつ男性名詞の例は以下のとおりである。

“бояре” (< боярин 役職名), “Буйничане” (「ブイニチ村の人々」), “Голынчане” (「ゴリニチ村の人々」), “жолнере” (「兵士たち」), “люде” (< люд 「人々」), “подляшане” (「ポドリヤーシエの人々」), “римляне” (< римлянин 「(ローマから派遣された) カトリック教会の聖職者」), “селяне” (「村民」), “смоляне” (「スモレンスクの人々」)

“жолнере” (「兵士たち」), “люде” (「人々」)⁽⁵⁾ 以外の名詞は, 単数語幹が /-anin-/, 複数語幹が /-an-/ で終り, 人の集団 (民族, 階層など) を意味している。このタイプの名詞は多くの場合複数形のみが現われるのであるが, 部分を表す接尾辞 /-in/ で語幹を拡張した単数形が使用されることもある。

*жолнер (cf. *U.* жовнір — жовнери, *Pol.* żołnierz — żołnierzy) の複数形は比較的出現頻度が高く 8 例あるが, そのうち жолнере という形式は 1 例のみである。他は “жолнери” (4 例), “жолнеры” (3 例) であるので, この語彙にかんしては複数主格語尾 /-i/ が規範的であると考えられる。людеにも語尾 /-i/ をもつ людиがあるが, こちらは出現頻度にかんする大きな違いがない (5:6)。

(2) 語尾 /-ove/, /-eve/ をもつ男性名詞 BAR における複数主格男性名詞のうち語尾 /-ove/ をもつ例は次のとおりである。“кролеве” (「国王たち」 < кроль), “мазурове” (「マゾヴィアの人々」), “панове” (「貴族, 名氏たち」 < пан), “послове” (「使者たち」 < *посол), “сенатрове” (「(ポーランド議会の) 上院議員たち」 < *сенатор), “татарове” (「タタール人たち」 < *татарин), これらのうち, панове,

(5) 単数語幹が /-anin-/ で終らないが複数主格語尾が /-e/ となるもう一つの例 люде は「人々, 民衆」の意味で使われている。これにたいして単数 люд は「(身分の低い) 家臣, 家来」の意味で使われている。

послове, татарове には標準的な語尾 /-i/ を持つ別形 паны, послы, татары がある。

/-ove/ は共通スラヴ語 -U- 語幹名詞の複数主格語尾であり (例えば *synъ — *synove), この語尾をもつ複数主格形は, その出現頻度と語彙の種類にかんして個々の文献による相違があるものの, 早い時期から東スラヴ語文献に見ることができる。例えば, NOV では попове, дворове, сынове, домове, послове, полкове, Чехове, Ляхове, Татарове。そしてこれにたいして, PVL では попове, сынове, послове, бѣсове, воробѣеве, ѿвошеве, жидове, монастыреве, борове, волове, сторожеве, полкове, Ляхове, Фрягове などがあり, NOV よりも語彙の種類が増加している。これらのうち NOV では дворове と послове は語尾 /-i/ をもつ複数主格形 двори, послы と併用されている。一方, PVL では бѣсове, воробѣеве, ѿвошеве, монастыреве, полкове に語尾 /-i/ をもつ別形 бѣси, воробьи, ѿвоши, монастыри, полци が認められる。したがって, BAR が中世ロシア年代記の伝統を受け継いだものである以上, 語尾 /-ove/ で終る複数主格形が存在しているのは当然のことなのかもしれない。

ところで, この語尾をもつ男性名詞の語彙内容を見ると, 中世ロシア年代記の例の多くは本来の -u- 語幹名詞 (сынове, домове, водове) と民族・部族名 (Ляхове, Татарове, Чехове, Фрягове, жидове) および特定の社会層での下位分類的な名称 (попове, сторожеве) であり, いずれも集合的な意味合いをもっている。そして, これらの語彙内容のうち, BAR では特に三番目のグループに属する例が多いのではないかと推測されるのであるが, この年代記はそう断定できるほどに十分な数の用例を提供していない。また, 書かれた時期が BAR と近い RAČI と KRAS はさらに例が少数である。すなわち латыголове, прусове, волохове, ляхове, панове, мистрове (RAČI), панове (KRAS)。

しかし、やはり書かれた時代の近い STAT には語尾 /-ove/ をもつ役職名が極めて多く観察される。すなわち、воеводове, старостове, опекунове, сынове, потомкове, гетманове, ротмистрове, бискупове, тивунове, войтове, бурмистрове など多数の例が見られる。特に, воеводове, старостове (< воевода, староста) のように本来共通スラヴ語 -A- 語幹女性名詞と同じタイプの格変化をもつはずの男性名詞が語尾 /-ove/ をもつことから, この語尾が BAR においても規範的な形式あったと考えてもよいのではないだろうか。

2.2.2 生格

語尾 /-ov, -ev/ を取るのは原則として男性名詞のみである。一方, 語尾 /-ej/, /-ø/ は全ての性の名詞に例を見ることができる。なお, 人間および動物を意味する名詞は生格形を対格形としても使用するので, この項で示される例は対格形も含まれている (2.2.4 参照)。

(1) 語尾 /-ov, -ev/ 硬子音語幹の男性名詞の複数生格語尾は /-ov/ となる。すなわち, уставов, градов, дождов, морозов, веков, немцов 等 (дожд については 2.4.(2) 参照)。また, 語幹が硬口蓋子音で終る男性名詞もやはり語尾は /-ov/ となる。例えば, богомолцов, посланцов, избранцов, новокрещенцов, волынцов, овощей 等。

格変化のパターンが I のタイプの女性名詞 (2.1.2.1) に属する男性名詞 здрайца (「裏切り者」) および патриарха (「総主教」) は, 複数生格に限って語尾が /-ov/ となる。すなわち, “здрайпов”, “патриархов” という形式を有する。

硬口蓋子音のうち /j/ を語幹末子音とする край と軟子音語幹の обыватель の複数生格形は, краев, обывателев であり, 語尾が /-ev/ となっている。

(2) 語尾 /-ej/ 軟子音語幹男性名詞の複数生格語尾はふつう /-ej/ となる。例えば, дней, князей, разорителей, неприятелей, коней, господарей, лосей。したがって, 接尾辞 /-tel'/ によって形成された обыватель の複数生格形 обывателей (2. 2. 2. (1)) は特殊な例と考えられる。

硬口蓋子音語幹男性名詞は語尾が /-ov/ となるのが一般的であるが, 一部の名詞は мужей, месяцев, грошей のように語尾 /-ej/ と結び付く。また, 複数主格形語尾が /-e/ となる люди («人々」—注釈(5)参照) も людей という生格形をもつ。

単数主格語尾が /-ø/ となる II のタイプの女性名詞 (2. 1. 2. 1 参照) は, церковей, паней, милостей, волностей, речей のように, 複数生格語尾が /-ej/ である。また, I のタイプに属する硬口蓋子音語幹名詞の中にもこの語尾をもつものがある。例えば, землей (< земля 「土地, 領地」), тисечей, тысячей, тысящей (< тисеча, тысяча, тысяща 「1000」)。

中性名詞の例は детей (< дети 「子供」—複数主格, 単数主格は дитя) のみである。

(3) 語尾 /-ø/ 複数生格でゼロ語尾となる男性名詞は человек (< человек 人間の単位としての「~人」) および рокошан, мешан, подолян, римлян, кашталян, христиан など複数主格が -ане, -яне で終る名詞である。後者と同じく階層や民族の集合体を意味し, 複数主格語尾 /-e/ または /-ove/ をもつ бояре (< боярин), татарове («タタール人たち」) の生格形も, бояр, татар のようにゼロ語尾となる。

I のタイプの女性名詞は基本的にゼロ語尾となる。すなわち, жон (< жона, жена 「妻」), жонок (< жонка 「女」), панянок (< панянка 「令嬢」), сил (< сила 「力」), таин (< таина 「(キリスト教の) 秘蹟」) などの硬子音語幹名詞だけではなく, недель (< неделя 「週, 日曜日」),

душ (< душа 「魂, 人」), гаковниц (< гаковница 「銃」), яловиц (< яловица 「出産したことの無い牝牛」) のように軟子音・硬口蓋子音語幹名詞もゼロ語尾である。また, 先に語尾 /-ej/ をとる名詞の例としてあげた тысяча にもゼロ語尾の複数生格 тысящ, тысящ が存在している。なお, мил (< *миля 距離の単位 「マイル」)⁽⁶⁾

中性硬子音語幹名詞も複数生格はゼロ語尾となる。例えば, ворот (< ворота 「門」—複数主格), лет (< лето 「年, 夏」), дел/дъл (< дѣло, дело 「大砲」)⁽⁷⁾, сал (< сало 「豚の脂肪の塩漬け(?)」), чудес (< чудеса 「奇跡」—単数形 чудо), яблок (< *яблоко 「リンゴ」), мест (< место 「町」) など。軟子音・硬口蓋子音語幹の例は見られない。

男性名詞として扱われることの多い княжа (2.1.1.1. (2) 参照) は, 一般の硬子音語幹中性名詞と異なった変化を持っているが, 複数生格形は княжат となりゼロ語尾である。

2.2.3 与格

三種類の語尾 /-om/, /-em/, /-am/ が観察される。

(1) 語尾 /-om/ 硬子音語幹男性名詞の規範的な語尾である。дияконом (< диякон 「補祭」), епископом (< епископ 「主教」), козаком (< козаки 「コサック」—複数のみ), паном (< пан 「~殿」), послом (< *посол 「使者」), купцом (< *купец 「商人」), лугом (< луг 「草地」), замком (< замок 「城」), двлвором (< двор 「屋敷」), прудом (< пруд 「粉挽の水車(?)」) 等の例がある。

硬子音語幹中性名詞は後述の語尾 /-am/ が一般的であるが, /-om/ を

(6) миля 「マイル」の長さにはポーランドとリトアニアで相違がある。リトアニアでは1マイルが約7.777km, ポーランドでは約5.76km, 約6.48km, 約7.20kmの三通りである。[辞書5] 参照。

(7) cf. Pol. działo 「大砲」

取る例として местом (< место 「町」) をあげることができる。

(2) 語尾 /-em/ 軟子音語幹男性名詞の規範的な語尾である。例えば, иереем (< иерей 「司祭」), обывателем (< обыватель 「住民」), презвитерем (< презвитер 「司祭」), респонсем (< респонсум 「返書, 返答」—2.4.(1) 参照) などがこの語尾をもっており, люде («人々」—複数主格) も与格形が людем となる。硬子音語幹男性名詞と中性名詞の例はない。

女性名詞では唯一 милостем (< милость 「慈悲」—BAR では貴人に対する敬称として “его милость”, “их милости” のような使われ方をすることが多い) がこの語尾をもっている。

(3) 語尾 /-am/ 女性名詞および中性名詞の規範的な語尾である。上述の милостем を除き, 女性名詞はすべてこの語尾を持っている。すなわち, дорогам (< дорога 「道, 道程」), странам (< страна 「地方」), сторонам (< сторона 「地方」), декларациям (< декларация 「布告」), волностям (< волность 「権利, 利権」) など。

中性名詞も原則として語尾 /-am/ となる。すなわち, правам (< право 「権利」), селам (< село 「村」), полям (< поле 「野原, 畑」) など。

2.2.4 対格

人間を意味する男性名詞および女性名詞の複数対格形には複数生格形を用いるのが一般的である。例えば, “мы к тебе послали *послов своих*” [140] («わたしは⁽⁸⁾あなたに自分の使者を送った»), “*Мещан, бояр, людей*

(8) “мы” は人称代名詞一人称複数形 («わたしたち (は)») であるが, これはモスクワ大公がポーランド・リトアニア国王ステファン (=イシュトヴァーン) ・バトーリイに宛てた書簡から引用したものである, 大公の自称と考えるべきである。

учтивых так *межей*, яко и *жон*, *детей* малых побили, поребали, попоганили, скарбов теж незличоних побрали с крамов и з домов” [153] (「市民たち、役人たち、もてなし好きの人々を、男も女も小さな子供も、(コサックたちは) 殺し、切り割り、凌辱した。そしてまた数え切れぬ財産を商店や家屋から奪った」) のように、人間を意味する名詞はその人間の社会的な地位や年齢などにかかわらず一律に生格形となる。

しかし、人間を意味する名詞でありながら、対格形が主格形と一致する例もある。たとえば “Того ж року 602, веснь и летъ на *люди* были з божого допущеня хоробы великие, горючи, бегунки; по местах, по селах много малых деток померло.” [166] (「同じ (1) 602年のこと。神が禍を見過ごされたために、春と夏に甚だしい病気が人々を襲った。熱病と舞踏病であった。町々で、村々で小さな子供が死んだ」), “Року того ж от господаря кроля vysлано напервей до Орши *енералы*” [144] (「同じ年に国王陛下によって先ずオルシャに警察長官が派遣された」), “Отец сына, сына отца, matka *детки*, детки матку, муж жену, жена мужа, покинувши *детки* свои, розно по местах, по селах разышлися, один другого покидали, не ведаючи один о другом, — мало не вси померли.” [165] (「父が息子を、息子が父を、母が子供たち、子供たちが母を、夫が妻を、妻が夫を (見捨て)、自分の子供たちを見捨てて、別々に町々や村々に離散していった。お互いを見捨て、お互いのことを知らないままであり、ほとんどの人々が死んだ」) に見られるように、*люди*, *енералы*, *детки* は複数主格形と一致している。ただし、*люди* にかんしては生格と一致する *людей* が使われている例もある。すなわち, “выдают выволане на *людей* невинных” [150] (「罪のない人々に対して追放令が発布される」)。

(9) 受動過去分詞中性形 “*выслано*” は、現代ウクライナ語と同じように、無人称文の述語として機能しており、対格補語を取る。したがって、“*енералы*” は複数対格形である。なお、受動過去分詞中性形の無人称文述語としての用法は、[文献1: 141] によれば南西ベラルーシ方言にも保存されているようである。

2.2.5 造格

複数造格語尾は名詞の性にかかわらず語尾 /-ami/ に一般化される傾向が見られるが、語尾が /-mi/ あるいは /-i/ となる例も若干ながら存在している。

(1) 語尾 /-i/ 共通スラヴ語 -O- 語幹名詞に由来する男性名詞および中性名詞のなかには、本来の複数造格語尾が反映された /-i/ (< /-y/) を持つ形式がある。男性名詞では “послы” (< *посол 「使者」) の1例のみであり、中性名詞では “слова” (< слово 「言葉」), “потомствы” (< потомство 「子孫」) の二例が観察される。

ただし、послы にはより一般的な別形 полами が存在している。しかし、*словами の使用例はなく、逆に слова が BAR だけでなく、РАЇ, KRAS, STAT にも頻繁に現れる。

(2) 語尾 /-mi/ /-mi/ は共通スラヴ語 -I- 語幹名詞に由来する男性名詞および女性名詞に固有の語尾である。BAR においては男性名詞 “людми” (< люде, люди 「人々」 — 複数主格形), “пенезьми” (< *пенез または пенезь 「金銭」) と女性名詞 “печатми” (< печать 「印, 印章」) がその例にあたる。

しかし、конми (< конь 「馬」), землянми (< землянин 「農村に居住して防衛にあたる役人・軍人」), боярми (< боярин 役職名), поляцми (< поляк 「ポーランド人」) のように共通スラヴ語 -I- 語幹名詞に起源を持たない男性名詞が語尾 /-mi/ と結び付くことも珍しくない。

(3) 語尾 /-ami/ 全ての性を通じて最も一般的な語尾である。

- 男性名詞 — дождами, возами, козаками, урядниками, огурками, послами, панами, рокошанами, жолнерами, чарами, выволанцами, привилеями

- 女性名詞— грозбами, прозбами, справами, слугами, слезами, прегрозками, горелками, руками, пчолами, королевнами, жонами, иконами, ротами, патриархами, здрайцами, речами— (патриархами, здрайцамиはIのタイプの女性名詞と同じ格変化をもつ男性名詞。речамиについては речми という形が STAT にある)
- 中性名詞— делами

2.2.6 所格

/-ex/ と /-ax/ の二種類の語尾が観察される。

(1) 語尾 /-ex/ この語尾は男性名詞に多く見られる。すなわち, краех (< край 「地方, 地域」), обычаех (< обычай 「慣習」), ровех (< ров 「溝, 堀」), градех (< град 「町」), огородех (< огород 「菜園, 野菜の畑」), королех (< король 「国王」), листех (< лист 「(特に国王の) 文書」), запустех (< запусы 「齋期前の最後の肉食日」) などである。

また, 中性名詞と女性名詞にも若干の例が見られる。すなわち, деревех (< дерево 「木」), летех (< лето 「年」),および санех (< сани 「櫓」), милостех (< милость 「慈悲」—尊称として使用) である。

複数形のみが現れる地名にも “Сморкгоинех”, “Вифлянтех” のように語尾 /-ex/ の例がある。

(2) 語尾 /-ax/ 上述の語尾 /-ex/ の例のうち край, лист, запусы については, 語尾 /-ax/ による別形も存在している。すなわち, краях, листах, запустах である。

語尾 /-ax/ は全ての性の名詞に共通しており, 一部の男性名詞を除いて, かなりの程度に一般化されている。

2.3 双数変化

双数が確認できるのは数詞“две”と結合する女性名詞に限られている。例えば，“на две *године*” [149]（「二時に」），“по две *копе*” [156]（「二コパで」—貨幣単位），“две *доле* *тех* *людей*” [164]（「二種類の人々」），“две *миле*” [171]（「二マイル」—距離の単位）のように、名詞の語幹末音が硬子音であるか（година, копа）、軟子音であるか（доля, миля）にかかわらず語尾が /-e/ となっている。そして、これらの双数形と数詞 две の結合は主格または対格であって、それ以外の格の場合は名詞が複数形となる。例えば，“обема *руками*”（「両手で」）。

男性名詞および中性名詞に双数形はない。例えば，“два *евангелицы*” [152]「二人の福音教会信徒」（主格）では、「2」を意味する数詞 два が *евангелик* の複数主格形と結び付いている。女性名詞についても“две *тысячи*” [143]（「2000」），“две *недели*; *недели* две” [154, 155, 163, 167]（「二週間」），“*жонки* албо *девки* две албо три” [167]（「二人の女あるいは二人ないし三人の娘」）のように数詞 две は複数主格形と共に用いられている。したがって、文法範疇としての双数はすでに存在していないと考えることができる。

2.4 特殊な変化を持つ名詞

BAR には特殊な語尾変化をもつ単語がある。それらのうちから、*респонсум*（「返書、返答」）、*дожд*（「雨」）、*патриарха*（「総主教」）を取り上げる。

(1) *респонсум* BAR に現れる *респонсум* は対格形であるが、主格形も同じく *респонсум* (*Lat. resposum*) と考えてよい。他にも単数形のみであるが、与格 *респонсови*、造格 *респонсем*、所格 *респонсе* を確認することができる。しかし，“*тот ест ефентия* (= *есентия*)

респонсем его к[о]р[олевской] м[и]л[ости] против зланю пред ним сенаторов...” [159] (「これが元老院議員たちの意見にたいする国王陛下の返答の主旨である」) の респонсум は統語的に生格の位置にあるので、不変化名詞として扱われているのか、あるいは年代記作成者または写字生の誤りであると思われる。

(2) дожд дожд の語幹形式は дожд- で安定している。この「雨」を意味する語彙は、東スラブ語文献で三種類の綴方がある。すなわち、古スラブ語から継承した дождь に加えて、ノヴゴロド等の北方の文献に特有の綴り дожгь とウクライナ等の南方の文献に特有の綴り дожчь である ([文献3] 参照)。しかし、BAR は南西ルシで書かれた年代記であるにもかかわらず、古スラブ語の綴りにもとづいた語幹形式しか現れない。一方、KRAS には “дожчу” (生格)、RAČI には “дождчу” (生格) という南形式しか認められず、語幹末子音が硬口蓋子音 (正確にいうと破擦音) であることを予想させる。

BAR において確認される形式は以下の通りである。

単数一主格 дожд, 生格 дожду, 造格 дождем

複数一主格 дожды, 生格 дожлов, 造格 дождами

単数主格形は -ь で終わっていないが、単数造格語尾が /-em/ であることから、やはり語幹末子音が硬口蓋子音である可能性が否定できない。また、複数主格語尾 /-i/ が硬口蓋子音 Ж, Ш, Ч, Щ の直後の特に語幹と語尾との境界で -ы と綴られることが多く ([文献4: 37]), 複数生格語尾も /-ov/ となることがある (2.2.2.(1))。したがって дожд の語幹末形式が -жд- で一定しているのは、年代記作者個人の規範意識に原因があるのかもしれない。

(3) патриарха BAR には男性名詞変化を示す патриарх と女性名詞

変化を示す патриарха が混在している。前者については、単数主格 патриарх 以外に、単数生格 патриарха、単数与格 патриарху、単数造格 патриархом、複数生格 патриархов が認められる。これに対して後者の方が出現例は多く、単数主格 патриарха、単数生格 патриархи、単数対格 патриарху、単数与格・所格 патриарсе、複数造格 патриархами が存在する。

патриарх は教会スラブ語であり、патриарха はおそらくラテン語 patriarcha に由来する形式である。もし、BAR の作者がギリシャ正教会の聖職者でカトリック教会に反感を持った人物であったとすれば（[文献 2: 95]）、ラテン語源の形式がかなりの程度に浸透していたということになる。

2.5 名詞変化のまとめ

かつて、M.I. カルネエヴァ・ペトルランは論文「バルクラボウ年代記の言語」の冒頭で、「現在知られているベラルーシ年代記のなかで、バルクラボウ年代記は言語的に孤立している。他の年代記の言語は生きたベラルーシ語の要素が古い文語のなかに独特の融合のしかたをしてできたものである。ところが、バルクラボウ年代記の言語は、その大部分がベラルーシの生きた口語である。ここにベラルーシ語史にたいするこの文献の価値がある」と述べた（[文献 2: 94]⁽¹⁰⁾）。確かに、新旧の言語要素が複雑に混じり合っておらず、言語的な均一性が実現されていることは、本論文において BAR を分析対象の中心に位置付けた第一の動機となっている。しかし、名詞の形態規範を見る限り、年代記の性格に違いがあっても、BAR に見られる規範は KRAS や RAČI のものと基本的に同じであり、まったくジャンルの違う

(10) “Сярод беларускіх летапісаў, якія дайшлі да нас, Баркулабаўскі летапіс па сваёй мове стаіць асобна. Мова іншых летапісаў з’яўляецца своеасаблівым сплавам старой кніжнай мовы з элементамі беларускай жывой мовы. Мова-ж Баркулабаўскага летапісу — гэта ў большай сваёй частцы жывая, гутарковая беларуская мова. У гэтым і заключацца каштоўнасць разглядаемага помніка для гісторыі беларускай мовы.”

STATとも規範意識を共有しているということが出来る。つまり、BARのテキストの「大部分がベラルーシの生きた口語」なのではなく、当時の標準的な書き言葉であると考えたほうがよい。

参考文献

- [1] Белахов, М. Г., Жовтобрюх, М. А., Колухов, В. И., *Восточнославянские языки*. Москва, 1987.
- [2] Карнеева-Петрулан, М. I., “Мова Баркулабаўскага летапісе”. *Працы Інстытута мовазнаўства АН БССР*. Вып. III. Мінск, 1957. стар. 94-111.
- [3] Якобсон, Р., “Спорный вопрос древнерусского правописания (ДЪЖГЪ, ДЪЖЧЪ)”. *Selected Writings*, I. pp.247-253.
- [4] 岡本崇男, 『『バルクラボウ年代記』における表記の規範意識について』。神戸外大論叢 48-3. 1997. pp.21-51.
- [5] 岡本崇男, 『『バルクラボウ年代記』における動詞過去形の人称表示について』。古代ロシア研究 20. 2000. pp.53-62.

資料

- [1] *Полное собрание русских летописей*. т. XXXII. Москва, 1975.
- [2] *Полное собрание русских летописей*. т. XXXV. Москва, 1980.
- [3] *Статут вялікага княства літоўскага 1588*. Мінск, 1989.
- [4] “Новгородская первая летопись старшего извода”. *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*. Москва-Ленинград, 1950.
- [5] “Повести временных лет по лаврентиевскому списку”. *Полное собрание русских летописей*. т. I. Москва, 1997.

辞書

- [1] *Белорусско-русский словарь*. 1-2. Мінск, 1988.
- [2] *Словарь русского языка XI-XVII вв.* Москва, 1975—
- [3] *Словник староукраїнської мови XIV-XV ст.* том 1-2. Київ, 1977—1978.
- [4] *Wielki słownik polsko-rosyjski*. 1-2. Moskwa-Warszawa, 1988.
- [5] Горбачевский, Н. И., *Словарь древняго актового языка сѣверо-западнаго края и Царства Польскаго*. Вильна, 1874. Hrsg. von O. Horbatsch. München, 1992.
- [6] Грінченко, Б., *Словарь української мови*. I-IV. Київ, 1907—1909.

Надруковано фотоспособом, 1996—1997.

[7] Носович, И. И., *Словарь белорусскаго нарѣчя*. СПб., 1870. Hrsg. von O. Horbatsch und G. Freidof. München, 1984.

[8] 岡本崇男 (編), 「ノヴゴロド第一年代記 (シノド本) 語彙集」. 古代ロシア研究 19. 1994. pp.3-165